

沖縄県竹富町小浜島・八重山語くもーむに小浜言葉

クリストファー デイビス
Christopher Davis (琉球大学)

7 はじめに

本報告では、沖縄県竹富町小浜島の言葉「クモームニ」の研究成果をまとめたものである。内容は大きく次の3つに分ける：(1) 音素・音声の特徴を紹介し、音素・音声・カナ表記法をまとめる。(2) これまでの調査で確認した格助詞及びとりたて助詞の記述をまとめる。(3) 童話「大きなかぶ」のクモームニ版の書き起こしを紹介する。これらの課題に入る前に、小浜言葉についての背景的な情報も簡単にまとめる。

なお、本報告のデータは、全て小浜島出身／在住で、小浜言葉の話者である大嵩善立氏(S2生、男性)への面接調査によるものである。大嵩善立氏以外にも、大嵩スエ氏・花城正美氏・大久英助氏・半嶺まどか氏にたくさんのご協力を頂いた。シカットウカラミーハイユー。

7.1 沖縄県竹富町小浜島の概要

八重山語小浜言葉(以下では「小浜言葉」とは、小浜島で話されている言語である。小浜島は、八重山諸島の島の一つである。西表島の東、石垣島の南西に位置する島であり、八重山諸島の一番大きな2つの島である西表島と石垣島の間に位置する。このように与那国島を除く八重山諸島のちょうど真ん中に位置し、島のうふだきと呼ばれる小山からは、八重山の各島々が展望できる。小浜言葉では、小浜島のことを *kumo:ma* 「クモーマ」と呼ぶ。伝統的な集落は、島のほぼ真ん中に位置し、さらに北と南にわけられる。これまでの調査では、これら北と南の間の方言差は確認されていない。この集落の他に、島の西側に細崎という集落もあり、この集落はもともと沖縄本島からの移住者によって作られたそうである。近年は、県外からの移住者が増えてきているようである。また、島の東側に大きなリゾートホテルもできて、マリンレジャー等を目的として島に来る観光客の数も増えてきているようである。NHKの連続テレビ小説「ちゅらさん」の撮影場所として県内県外を問わず有名な島でもある。

歴史的には、小浜島は石垣市字宮良との関係が深く、1771年に起こった明和の大津波の後、小浜島から多くの人が宮良に移住させられたようである。その移住で、伝統行事などの文化もつながるようになって、今でも交流があるようである。この関係があるため、小浜島と宮良をそれぞれ *ujazima* 「ウヤズイマ」(親島)と *ɸa:zima* 「ファーズイマ」(子島)と呼ばれることもある。

7.2 八重山語小浜言葉の概要

小浜島の言葉は、UNESCOのAtlas of the World's Languages in Dangerにあげられた琉球

諸語の中の八重山語の中の一つの言葉である。小浜では、自らの言葉を kumo:muni「クモームニ」と言う。八重山語は、UNESCO のリストによると、「重大な危険」と判定されている。その中の小浜言葉も、大変危機的な状況にあることを本研究で実感した。小浜言葉が話せる世代の人は、若い世代（子供や孫の世代）にほとんど島の言葉で話すことはないようである。しかしながら、伝統行事などの場面等、小浜言葉の使用が要求される場面もあるようである。これらの場面にての言葉の伝承がどれぐらいされているかは、著者にはわからない。

以上で述べたように、小浜島は石垣島の宮良との歴史的な関係が深いものの、言語的には宮良は石垣の言葉に近いようで、小浜言葉との差が割りと大きいようである。小浜言葉の目立つ特徴の一つとして、以下で述べる語頭の無声化がある。小浜島の人が日本語共通語で話すときにも、しばしばこの特徴を観察することができる。

7.3 人口構成からみた小浜言葉

竹富町地区別人口動態票（平成30年1月末）によれば、小浜島の人口は717人である。以上で述べたように、この人口の中に、移住者等、小浜島以外の場所にルーツを持っている人もたくさん含まれる。また、平成22年の国勢調査のデータによれば、当時の65歳以上の人口は108人であったようである。小浜言葉を流暢に話せる世代とは、主に70代以上だと思われる。したがって、小浜言葉の母語話者の数は100人未満となっていることが推測できる。しかし、比較的若い世代でも、個人差はあるものの、自信がなくても小浜言葉で話せる人がいることも確実である。話せる・話せないの境目を簡単には設定することはできない。特に言葉の伝承を考えた場合には、「受動的話者」等の知識を拒否すべきでないと思われる。

7.4 言葉資料の作成

2010年に、小浜中学校創立六十周年記念誌として「ふるさとの味・しまくとうば」という本が出版された。この本では、小浜言葉の挨拶・行事における言葉・日常会話・語彙等がカナ表記で書いてあり、CDも付いている。これ以外の学習向けの資料は、著者が把握している限り存在しないようである。この他に、1984年に出版された「竹富島・小浜島の昔話」という本には、現場調査によって収集された話がカナ表記でまとめられている。著者が聞いた話では、この本を編集した段階にはこれらの話の録音はあったものの、現在それが残っているかは不明である。これ以外にも、島の伝統文化や風習等が記述されている資料はあるものの、言葉そのものの継承に向けた資料は、今のところこれ以上確認できていない。

8 音素と音声

8.1 音素表

小浜言葉の音韻構成に関しては、仲原（2004:260）では以下のものを設定している：

- 母音音素： i, ī, e, a, o, u （6個）
 半母音音素： j, w （2個）
 子音音素： h, ʔ, k, g, t, d, n, c, s, z, r, p, b, m （14個）
 拍音素： N, Q, R （3個）

本研究では、仲原とほとんど同じ音韻を設定するが、子音音素「ʔ」を設定する必要性はないと判断した。仲原の論文では、母音で始まる音節を設定しないため、母音で始まると思われる音節の頭にこの「ʔ」が音韻として使用されているようである。例えば、「イツィ」（魚）の音韻表記が /'ici/ となっているが、本研究ではこれらの例を /ici/ と考える。音声的には、仲原の論文でも、上の例は [itsi] と [ʔitsi] とも発音されているが、声門閉鎖音の有無による音韻的な対立は小浜言葉を含め八重山語諸方言にはないようである。

拍のカナ表記・音声表記・音韻表記は、次頁に一覧表を掲載する（表1参照）。この拍表は、仲原（2004:261-262）に近いのだが、本研究で確認した音声の特徴等による違いもあるため、仲原の論文も参照されたい。

拍音素に関しては、Nはその環境に応じて様々な鼻音子音として現れ、カナ表記では「ん」と書く。Qは、その次にくる子音と同じ子音として現れ、カナ表記では小さい「っ」と書く。そして、Rは長母音を区別するためのものであり、カナ表記では「ー」と表記する。本研究の音韻表記では、N・Q・Rを用いない（独立した音素として設定しない）。その代わりに、Nをnとして記し、Qはその次の子音と同じ子音（重子音）を書くことで表す。また、Rはその前の母音をもう一度書くことで表す。つまり、長母音は音素表記では母音を二回書くことで表す。なお、これまでの調査では、短母音と長母音の区別が曖昧なケースが多く、判断が難しい場合もあった。本論文では、著者の判断に基づいて短母音と長母音で区別しているが、あくまで著者の判断であることを了承されたい。未確認なものは、*で記されている。

仲原では未確認となっていた拍「へ」は、以下のような例で確認できた（なお、このセクションの用例は4行構成で、カナ表記・訳・音声表記・音素表記で記す）：

- (1) ばかはーる むぬんきぬ くるま のーへーる。
 若い 人たちが 車を 直した。
 bakaha:ru mununkinu kuruma no:he:ru
 baka-haa-ru munu-nki=nu kuruma nooh-ee-ru

【表 1：拍の一覧表】

あ	い	う	え	お	*	や	ゆ	よ	わ
[(?)a]	[(?)i]	[(?)u]	[(?)e]	[(?)o]		[ja]	[ju]	[jo]	[wa]
/a/	/i/	/u/	/e/	/o/		/ya/	/yu/	/yo/	/wa/
は	ひ	ふ	へ	ほ	*				
[ha]	[çi]	[φu]	[he]	[ho,(φo)]					
/ha/	/hi/	/hu/	/he/	/ho/					
ふあ	ふい	ふ	*ふえ	ふお	*				
[φa]	[φi]	[φu]		[φo]					
/fa/	/fi/	/fu/		/fo/					
か	き	く	け	こ	くい	きや	きゆ	きよ	くわ
[ka]	[ki]	[ku]	[ke]	[ko]	[ki,k ^ε i,ks]	[kja]	[kju]	[kjo]	[kwa]
/ka/	/ki/	/ku/	/ke/	/ko/	/kī/	/kya/	/kyu/	/kyo/	/kwa/
が	ぎ	ぐ	げ	ご	*	*	*	*	*
[ga]	[gi]	[gu]	[ge]	[go]					
/ga/	/gi/	/gu/	/ge/	/go/					
た	てい	とう	て	と					
[ta]	[ti]	[tu]	[te]	[to]					
/ta/	/ti/	/tu/	/te/	/to/					
だ	でい	どう	で	ど					
[da]	[di]	[du]	[de]	[do]					
/da/	/di/	/du/	/de/	/do/					
な	に	ぬ	ね	の					
[na]	[ni]	[nu]	[ne]	[no]					
/na/	/ni/	/nu/	/ne/	/no/					
ら	り	る	れ	ろ	るい				
[ra]	[ri]	[ru]	[re]	[ro]	[rī]				
/ra/	/ri/	/ru/	/re/	/ro/	/rī/				
つあ	ち	つ	つえ	つお	つい	ちや	ちゆ	ちよ	
[tsa]	[tçi]	[tsu]	[tse,tçe]	[tso]	[tsī]	[tça]	[tçu]	[tço]	
/ca/	/ci/	/cu/	/ce/	/co/	/cī/	/cya/	/cyu/	/cyo/	
ざ	じ	ず	*ぜ	ぞ	ずい	じゃ	じゆ	じよ	
[dza]	[dçi]	[dzu]		[dzo]	[dzi]	[dça]	[dçu]	[dço]	
/za/	/zi/	/zu/		/zo/	/zo/	/zya/	/zyu/	/zyo/	
さ	し	す	せ	そ	すい	しゃ	しゆ	しよ	
[sa]	[çi]	[su]	[se,çe]	[so]	[sī]	[ça]	[çu]	[ço]	
/sa/	/si/	/su/	/se/	/so/	/sī/	/sya/	/syu/	/syo/	

また、仲原の論文では、[ɸa]「ふぁ」は、音素的に /hwa/ と分析している。要するに、音声的に[ɸ]として現れる子音を、独立した音素として分析せず、音素 /h/ と /w/ との組み合わせと分析している。/w/ の後ろにくることが可能な母音は、/a/ だけのものである。要するに、/wa/があるのに対して、/wi/や/wo/等は存在しないようである。そのため、仲原の分析では、/hwi/・/hwe/・/hwo/・/hwu/ がないと予測できるだろう。しかし、本研究では、[ɸa] の他に、以下の例文で示すように[ɸo]と[ɸi]も確認している。これらは、それぞれ[ho]と[hi]と対立しているようであるので、母音/o/と/i/の前でも[ɸ]と[h]が対立し、それぞれを別の音素と考えることにした。[ɸ]の音素表記を/f/とする。なお、/hu/は音声的に常に[ɸu]となるため、/u/の前では/h/と/f/の対立は見えない。また、仲原の論文では、/ho/が音声的に[ho]とも[ɸo]とも記述されているが、おそらく/ho/は音声的に[ho]とも[ɸo]とも発音されるのに対し、/fo/は常に[ɸo]として現れると思われる。

- (2) うぬ でんぷんわとう ばかい ふおーたるゆー。
 その でんぷんを 炊いて 食べました。
 unu denpunwatu bakai ɸo:taruju:
 unu denpun=wa=tu baka-i foo-ta-ru=yuu.

- (3) じん からすいとーんどう むんどーい ふいーた。
 お金を 貸したけど 戻して くれた。
 dʒiŋ kaʒasito:ndu mundo:i ɸi:ta
 zin karasitoondu mundoo-i fii-ta

8.2 母音の無声化

以上の音素・音声・カナ表記では、母音の無声・有声の対立はされていない。小浜言葉では、母音の無声化が多いが、それがいつ起こるのかについて、これまでの研究では予測できる一般化はできていない。仲原（2004:262）がこれについて次のように述べている：

「小浜方言の母音の特徴として、母音の無声化が挙げられる。東日本方言や九州方言、北琉球方言の諸方言などで無声の子音に挟まれた狭母音が無声化するのに対し、当該方言には広母音 [a]の無声化がみられる。これは南琉球方言の諸方言に広くみられる現象であるが、小浜方言では、波照間方言や西表古見方言などのように、続く有声子音[m, n, r] まで無声化する。ただし、インフォーマントや語彙によって、無声化しないものもみられる。」

仲原の論文では、無声母音は無声化によるものだと分析し、音素として無声母音を設定していない。しかし、どの環境において母音が無声化するかが、明確ではない。八重山語白保言葉に関しては、中川・ラウ・田窪（2015）が似たような現象を分析し、無声母音が音素的な対立を示していない（無声母音が有声母音の異音である）と主張しているが、小浜言葉に関しては、母音が無声化する環境を予測できるかは不明である。特に目立つ無声化

の状況として、語頭の無声子音の後ろの母音 a・i・u である。これらの母音が無声化する
 かないかは、以下の表でまとめたような分布を示すようである。

無声化する例			無声化しない例		
pəŋa	鼻	無声子音	bata	お腹	有声子音
təɟu	誰	短母音	ta:	誰	長母音
kəkutʃi	顎	短子音	hakkire:ja	はっきりは	重子音
həŋasī	話	非拍鼻音	kaŋga:	あっち	拍鼻音
pəɟi ku:	急いで来い	母音・子音	paiʃa ku:	はやく来い	母音・母音

以上のデータからは、次のような一般化が言えよう：

一般化：語頭音節が無声子音で始まる場合、その核となる母音の無声化が生じる。しかし、語頭音節が長母音・二重母音・重子音・拍鼻音のいずれかを含む場合は、無声化が生じない。

しかし、以上の無声化の一般化では無声化するはずの語彙の中に、無声化しないものが存在することも確認されている。例えば、以下の例では、どれもが一般化から予測すれば無声化するはずであるが、無声化するものとしめないものが対立しているようである：

無声化する例		無声化しない例	
kɯtsɨnami	背中	kumo:muni	小浜言葉
kɯpo:hi	こぼし	kuruma	車

以上のような、一般化では説明できない無声化の対立があれば、無声母音と有声母音を音素的な対立として考える必要がある可能性がある。この点は、今後の大きな課題の一つである。

以上の母音の無声化が生じると、母音の後の子音も無声化するようである：

/turi/ → [tɯɟi] (鳥)
 /taru/ → [təɟu] (誰)
 /tana/ → [təŋa] (棚)
 /tama/ → [təŋa] (弾)

この現象もあって、以下のような例の音素表記をどう考えるべきかは問題となる：

[kɯpo:ɟi] (こぼし)
 [tʃɨpi] (尻)
 [təpo:ri] (ください)
 [tsɨpuru] (頭)

これらの語彙の二番目の音節は無声子音 [p] に聞こえる子音で始まっている。しかし、八重山語の他方言を見ると、これらの単語の p に相当するものは b となっている。以上の子音の無声化から考えると、これらの単語の音素表記を、例えば「頭」を例にとると /cɪburu/ にして、音声的に無声化を受けて [tsɪpuru] となるように考えることもできるだろう。また、これらの無声子音 [p] は、著者の感覚では、他の[p]とは少し音声的に違うように聞こえるが、これについての細かい調査は今後の課題の一つである。

8.3 中舌母音の摩擦音化

小浜言葉の音素には、いわゆる中舌母音 i が存在する。この音素は、無声破裂音 p と k の後ろでは、以上で説明した無声化が生じて、更に摩擦音化とでも呼ぶべき現象も見られる。例えば、「昨日」を意味する単語の音素表記は /kɪnu/ 「クィヌ」とするが、発音上では以上の無声化を受けて [kɪ̥ɲu] になるだけではなく、無声化した中舌母音が s のように聞こえる摩擦音を伴い、音声的には [kʰɪ̥ɲu] や [ksɲu] のように聞こえる。また、「引く」を意味する動詞の音素表記を /piku/ として捉えるが、これも音声的には [pʰɪ̥ku] や [psku] のように発音される。また、この動詞が連用形 /piki/ となる場合、一種の母音調和が起こり、中舌母音が [i] のような母音となり、無声化の結果として [pɪ̥ki] のようになるが、更に摩擦音化して [pʃki] のように発音されるようである。これらの例を、音素的に母音である /i/の無声化と摩擦音化による異音として扱うが、これらの子音として考えることもできるかもしれない。

9 名詞の格・とりたて

このセクションでは、格助詞ととりたて助詞の記述をまとめる。このセクションの用例は音声表記を省き音韻表記を用いる。問題とする文の部分は下線_____で示し、格形式やとりたて助詞は「= (ハイフン)」で示す。なお、以下の格・とりたて助詞は、これまでの調査で確かめたものだけであり、今後の調査で更に確認する必要がある。

【表 2：格助詞・とりたて助詞の一覧】

Φ	対格／主格／属格	ACC／NOM／GEN	accusative／nominative／genitive
=nu	主格／属格	NOM／GEN	nominative／genitive
=nge	与格／方向格	DAT／ALL	dative／allative
=nga	場所格	LOC	locative
=kara	奪格	ABL	ablative
=kati	具格	INS	instrumental
=tu	共格	COM	comitative

=tu	焦点	FOC	focus
=ndu	主格＋焦点	NOM.FOC	nominative+focus
=wa	目的語＋焦点	OBJ.FOC	object focus
=n	「も」	*	also
=ya	トピック（主題）	TOP	topic

9.1 格助詞

=nu 又

主語が =nu でマークされることが多い。この =nu を主格として考える。

- (4) ふねーぬ ふあー やらびる。
お母さんが 子供を 呼んでいる。
bunee=nu faa yarabi(ru)

- (5) ふにぬ なーりる。
船が 流れている。
funi=nu naariru

また、名詞が名詞を修飾するときにも、=nu が使われる。この =nu を属格として考える。

- (6) ふねーんどう ふあーぬ ていー ばなすいたる。
お母さんが 子供の 手を 離した。
bunee=ndu faa=nu tii panasitaru

ハダカ格

ハダカ格とは、表面的には何も格助詞が使われないことを指す。目的語はハダカ格で現れることが多い。

- (7) ばーまんどう みんつい ぴんげ なーらすいたる。
おばあさんが 水を 溝に 流した。
baama=ndu minci pin=ge naarasitaru.

- (8) ばかーる むぬんきんどう くるま のーすいたる。
若い 人たちが 車を 直した。
bakaaru munu-nki=ndu kuruma noositaru

例は少ないが、主語もハダカ格でマークされることもあるようである：

- (9) あーふあー ずいまんがとう わーりるかー？
 おばあさんは どこに いらっしやる（いる）か？
aafaa zīma=nga=tu waariru=kaa

また、=nu を使わないで、属格のようなハダカ格の用法がある：

- (10) わー やーんが たーとう いついばん ぐまはるかー？
 あなたの 家で 誰が 一番 小さいか？
waa yaa=nga taa=tu icipan gumaharu=kaa

どの場合に属格 =nu を使うか、ハダカ格を使うかは、今後の調査が必要である。

=yu ユ

使われる頻度は少ないようであるが、目的語を =yu でマークすることもある。この =yu を対格として考える。

- (11) あーふあーや まーゆ やらびきー。
 おばあさんは 孫を 呼んできた。
 aafaa=yu maa=yu yarabi kii

=nge ング

=nge は、様々な場面で使われる。まずは、主語が移動する場所を表す例から見る：

- (12) ずいまんげとう わーるかー？
 どこに いらっしやる（行く）か？
zīma=nge=tu waaru=kaa

このような用法は、方向格として考えることができる。これと似たような用法では、目的語を移動させる場所や置く場所を表す用法もある：

- (13) ふあーぬ ちゃわん たなんげ しんちみたる。
 子供が 茶碗を 棚に 片付けた。
 faa=nu cyawan tana=nge sincimitaru
- (14) あーらすいとろ うぬ みんつあー ずいまんげとう なーらすいたらー？
 洗った その 水は どこに 流したの？
 aarasītoro unu mincaa zīma=nge=tu naarasītaraa

また、=nge には、いわゆる間接目的語をマークする用法がある：

- (15) とうなるいぬ ふいとうんげ からすいたる。
 隣の 人に 貸した。
 tunarī=nu pītu=nge karasītaru

また、受身文の能動者もマークする：

- (16) しんしーんげ たーとう したきらりたるかー？
 先生に 誰が 叩かれたか？
sinsii=nge taa=tu sitakiraritaru=kaa

このような用法では、=nge を与格として考えられる。

=nge が付く名詞が ~n「ン」で終わる場合は、=ge となる：

- (17) ばーまんどう みんつい びんげ なーらすいたる。
 おばあさんが 水を 溝に 流した。
 baama=ndu minci pin=ge naarasitaru.

=nga ンガ

=nga は、存在する場所をマークする用法がある。この用法を、場所格として捉えることができる。

- (18) あーふあー ずいまんがとう わーりるかー？
 おばあさんは どこに いらっしゃる（いる）か？
 aafaa zīma=nga=tu waariru=kaa

- (19) やーまんがとう わーりる。
 台所（ヤーマ）に いらっしゃる（いる）。
yaama=nga=tu waariru

以上の例文はいずれも、「〇〇にいる」という意味になるようで、「〇〇に行く」の意味を表すには、=nga の代わりに方向格 =nge を使い、さらに動詞を waaru にしなければならないようである。この対比からすると、=nga は「存在する場所」のような意味を表すのに対し、=nge が「方向先の場所」のような意味を表すように思われる。

=nga には、次のような用法もある（〇〇の中で、のような用法）：

- (20) わー やーんが たーとう いついばん ぐまはるかー？
 あなたの 家で 誰が 一番 小さいか？
 waa yaa=nga taa=tu icipan gumaharu=kaa

=kara カラ

=kara は移動の出発点を表す。この用法から属格として捉える。

- (21) がっこーから かいりした？
 学校から 帰ったの？
gakkoo=kara kairi-sita?

=kati カティ

=kati は、日本語の「で」に近い様々なが用法がある。次の例文は、具格の用法を示す：

- (22) ...していつかていとう はいたるゆー。
 ...ソテツで (食事を) していました。
siticu=kati=tu haitaru=yuu

「団体で・集合で」の意味も表す：

- (23) むーるかてい かいり はりした。
 みんなで 帰って 行った。
muuru=kati kairi hari-sita

「健康で」のような、状態をマークする用法もある：

- (24) きんこーかてい わーりたぼーり。
 健康で いてください。
kinkoo=kati waari-tapoori

=tu トウ

=tu は、以下の例文で示すように、行動を取る相手をマークする。この用法を共格として捉える。

- (25) みなまー うわさーとう はなすいわ はいる。
 今は あなた(たち)と 話を している。
 minamaa (u)wasaa=tu hanasi=wa hairu

9.2 とりたて助詞

=tu トウ

=tu は、焦点を表すとりたて助詞であり、八重山語の他言葉の =du に相当するものである。八重山語で広く見られる傾向として、この焦点助辞が多くの文で使われ、文法的かつ

意味的な役割が大きいようである。次の例では、=tu がハダカの目的語に付く：

- (26) のーとう みりるかー？
 何を 見ているか？
noo=tu miriru=kaa

- (27) いぬとう みりるゆー。
 犬を 見えています。
inu=tu miriru=yuu

これらの例のように、=tu が疑問文の疑問詞に付くことが多く、また返答文の疑問詞の返答となる句に付くことが多い。疑問詞 taa が主語となるときにも、=tu が付く形で現れるようである：

- (28) たーとう なきるかー？
 誰が ないているか？
taa=tu nakiru=kaa

しかし、これ以外の主語は、=tu ではなく、以下で紹介する =ndu でマークされるようである。

=tu はこれ以外に、様々な句に付くことがある。次の例では、副詞的な疑問詞に付く：

- (29) うわー ぬーんでいとう こつつあすいたるかー？
 あなた なんて 壊したか？
 (u)waa nuundi=tu koccasitaru=kaa

=ndu ンドウ

=ndu が主語に付き、主格 =nu と焦点の =tu が表す意味を同時に表すようである。

- (30) しんしーんどう ふあーわ かんちみねーぬ。
 先生が 子供を 隠してしまった。
sinsii=ndu faa=wa kancimi-neenu

- (31) ふにんどう なーりる。
 船が 流れている。
funi=ndu naariru

=wa フ

=wa は、これまでの調査では以下のように目的語に付く例を確認している：

- (32) しんしーんどう ふあーわ かんちみねーぬ。
先生が 子供を 隠してしまった。
sinsii=ndu faa=wa kancimi-neenu

- (33) あうちんどう ぼーわ ぶりたる。
おじいさんが 棒を 折った。
auci=ndu boo=wa buritaru

=wa は、八重山語の他言葉で見られる =ba に相当するものだと思われるが、宮良言葉では、この =ba が一種の主語にも付くことが確認されている。目的語に付く以外の用法は今のところ小浜言葉では確認されていない。また、=wa が付くことによってどんな意味を表すかも不明である。今後の課題の一つである。

=wa の後ろに焦点を表す =tu が付く例もある：

- (34) ぼーしわとう ぬき はりした。
帽子を 抜いて 行った。
boosi=wa=tu nuki hari-sita

=n ン

=n は、日本語の「も」と似た用法を示す：

- (35) ばぬん いついばんでいらなー。
私も 頑張ろうね。
banu=n icipandira=naa

=ya ヤ

=ya は、日本語の「は」に相当する用法が多く見られ、トピック・マーカースとして捉えられる。

- (36) まーや いぬわ やらびきー。
孫は 犬を 呼んできた。
maa=ya inu=wa yarabi kii

否定述語と一緒に現れる=ya もよく現れる：

- (37) あきらーや あらぬ。 うとうとうんどう なきる。
アキラでは ない 弟が泣いている。
akiraa=ya aranu ututu=ndu nakiru

上の例では、主語「アキラ」の最後の母音が長母音となっている。このような長母音化は、琉球諸語の先行研究では普通は =ya との融合によるものだとされてきた。しかし小浜言葉では、

この「長母音形」の後ろに、=ya が更に付くことがしばしば観察される。「犬」は小浜言葉でも inu であるが、その「長母音形」が inoo である。以下の例が示すように、この長母音形の後ろに=ya が更に付くことがある：

- (38) いのーや まーわ びっけひー
 犬は 孫を ひっばって
inoo=ya maa=wa pikkehii

長母音形の inoo が inu=ya からの融合によるものであれば、その後ろに=ya が更に付くはずがない。また、長母音形と思われるものに、焦点を表す=ndu が付くこともあるようである。「おじいさん」を意味する単語は auci であるが、これの長母音形が aucee である。以下の例では、この長母音形に=ndu が付いている：

- (39) あうちえーんどう だいくにぬ たにわ まき。
 おじいさんが 大根の たねを まいた。
aucee=ndu daikuni=nu tani=wa maki

長母音形とトピック=ya の関係の詳細は、今後の研究の一つの課題である。

10 「おおきなかぶ」クモームニ版

本節では、童話「おおきなかぶ」をクモームニに訳したものを報告する。以下でまとめた訳は、大嵩善立氏の協力によるものである。以下でまとめた言い方以外に他の訳し方もあったが、今回はそれを省く。書き起こしは三行にわけて、カナ表記・訳・音声表記となっている。三行目の表記では、録音した音に近い細かい音声表記を記す。同じ単語でも、いくつかの違う発音があった場合は、音声表記でその発音の通りに表記するようにした。特に注意すべき点には、動詞「引く」に相当する「ぷいくい」や「ぷいき」・「びき」がある。カナ表記でも三通りの表記になっているが、音声表記ではさらにその発音の多様性に従ったため、さらに多数の表記となっている。以上で説明した無声化と中舌母音の摩擦音化の最終的な分析はまだできていないため、発音に近い音声表記を選んだ。

1. あうちえーんどう だいくにぬ たにわ まき。
おじいさんが 大根の たねを まいた。
autʃe:=ndu daikuni=nu t̃ãni=wa mak-i
2. あまは一 かばは一 だいくに なり、
美味しい 香りがいい 大根に なれ、
ama-ha: k̃apa-ha: daikuni: nar-i
3. まいは一 めーみん まいは一 だいくに なり たぼーり。
大きい もっと 大きな 大根に なって ください。
mai-ha: me:mim mai-ha: daikuni nari t̃apo:r-i
4. あまは一 がんじょーは一る よーめい ぬーんくわん ねーぬついくん¹
美味しくて 元気な ?? 何もかも なく
ama-ha: gandzo:-ha:-ru jo:mei nu:nkwan ne:nu-ts̃ikun
5. まいは一 だいくに まらしみ たぼーり。
大きな 大根を 産んで ください。
mai-ha: daikuni mar-af̃imi t̃apo:r-i
6. あうちえーや だいくに ぷいくいぬくんでい
おじいさんは 大根 引き抜こうと
autʃe:=ja daikuni p̃ĩki-nuku=ndi
7. はすいとーんどう だいくねー ぷいかららぬ。

¹ 「よーめい ぬーんくわん ねーぬついくん」は、原文にある「とてつもなく」の訳であるが、この表現の細かい分析は今のところ不明である。

- だけど 大根は 抜けない。
 hasi̥to:ndu daikune: pʰi̥kararanu
8. あうちえーや あーふあーわ やらびきー。
 おじいさんは おばあさんを 呼んできた。
 autʃe:=ja a:ɸa:=wa jarabi ki:
9. あーふあーや あうちわ ぴけーひー、
 おばあさんは おじいさんを ひっぱって、
 a:ɸa:=ja: autʃi=wa pʃi̥ke:hi:
10. あうちえーんどう だいくに ぴけーひー、
 おじいさんが 大根を ひっぱって
 autʃe:=ndu daikuni: pʃi̥ke:hi:
11. はしていん だいくねー ぷいかららな一た。
 それでも 大根は 抜けなかった。
 haʃi̥ti̥n daikune: pʰi̥kararanaa:ta
12. あーふあーや まーゆ やらびきー。
 おばあさんは 孫を 呼んできた。
 a:ɸa:=ja ma:=ju jarabi ki:
13. まーんどう あーふあーわ ぴけーひー、
 孫が おばあさんを ひっぱって、
 ma:=ndu a:ɸa:=wa pʃi̥ke:hi:
14. あーふあーや あうちわ ぴっけーひー、
 おばあさんは おじいさんを ひっぱって、
 a:ɸa:=ja autʃi=wa pʃi̥kke:hi:
15. あうちえーや だいくにわ ぴきぬくんでい
 おじいさんは だいこんを 引き抜こうと
 autʃe:=ja daikuni=wa pʃi̥ki-nuku=ndi
16. はしていん めーんだ めーんだ だいくねー ぷいかららぬ。
 それでも まだ まだ 大根は ぬけない。
 haʃi̥ti̥n me:nda me:nda daikune: pʰi̥kararanu
17. まーや いぬわ やらびきー。

- 孫は 犬を 呼んできた。
 ma:=ja inu=wa jarabi ki:
18. いのーや まーわ ぴっけひー、
 犬は 孫を ひっばって、
 ino:=ja ma:=wa p̄j̄kkehi:
19. まーんどう あーふあーわ ぴっけひー、
 孫が おばあさんを ひっばって、
 ma:=ndu a:φa:=wa p̄j̄kkehi:
20. あーふあーや あうちわ ぴっけーひー、
 おばあさんは おじいさんを ひっばって、
 a:φa:=ja aut̄j̄i=wa p̄j̄kke:hi:
21. あうちえーや だいくにわ ふいきぬくんでい
 おじいさんは 大根を 引き抜こうと
 aut̄fe:=ja: daikuni=wa p̄s̄iki-nuku=ndi
22. はしていん めーんだ めーんだ ふいきぬかららぬ。
 それでも まだ まだ 引き抜けない。
 haf̄j̄tiN me:nda me:nda p̄f̄iki-nukararanu
23. いのーや まやわ やらびきー。
 犬は 猫を 呼んできた。
 ino:=ja: maja=wa jarabi ki:
24. まやーんどう いぬわ ぴっけーひー、
 猫は 犬を ひっばって、
 maja:=ndu inu=wa p̄j̄kkehi
25. いぬんどう まーわ ぴっけーひー、
 犬が 孫を ひっばって、
 inu=ndu ma:=wa p̄j̄kke:hi
26. まーや あーふあーわ ぴっけーひー、
 孫は おばあさんを ひっばって、
 ma:=ja a:φa:=wa p̄j̄kke:hi
27. あーふあーや あうちわ ぴっけーい、

- おばあさんは おじいさんを ひっばって、
a:ɸa:=ja autʃi=wa pi̯kke:i
28. あうちえーや だいくにわ ぷいきぬくんでい
おじいさんは 大根を 引き抜こうと
autʃe:=ja daikuni=wa p̄i̯ki-nuku=ndi
29. はしていん だいくねー ぷいかららな一た。
それでも 大根は 抜けなかった。
haʃi̯tiN daikune: p̄i̯kararana:ta
30. まやー〈わ〉² うやんちゅわ やらびきー。
猫は ねずみを 呼んできた。
maja:<=wa> ujantʃu=wa jarabiki:
31. うやんちゅや まやゆ びっけーひー、
ねずみは 猫を ひっばって、
ujantʃu=ja: maja=ju pi̯kke: hi:
32. まやんどう いぬわ びっけーひー、
猫が 犬を ひっばって、
maja=ndu inu=wa pi̯kke:hi:
33. いぬんどう まーわ びっけーひー、
犬が 猫を ひっばって、
inu=ndu ma:=wa pi̯kke:hi:
34. まーんどう あーふあーわ びっけーひー、
孫が おばあさんを ひっばって、
ma:=ndu a:ɸa:=wa pi̯kke:hi:
35. あーふあーや あうちわ びっけーひー、
おばあさんは おじいさんを ひっばって、
a:ɸa:=ja autʃi=wa pi̯kke:hi:
36. あうちえーや だいくに びっけーひー、

² この〈わ〉、日本語共通語の「は」だと思われ、小浜言葉では「ヤ」になると思われる。

おじいさんは 大根を ひっぱって、
 autʃe:=ja daikuni pʃi̯kke:hi:

37. やっとうかっとう だいくねー ぷいきぬかりた。
 やっと 大根は 引き抜けた。
 jattukattu daikune: pʃi̯kinukarita

参考文献

- 記念誌編集委員会（編）（2010）『小浜中学校創立六十周年記念誌・ふるさとの味・しまくとうば』、小浜中学校創立六十周年事業期成会。
 福田晃（編）（1984）『竹富島・小浜島の昔話：沖縄県八重山郡竹富町』、南東昔話叢書第9号、同朋舎出版。
 仲原穰（2004）「八重山小浜方言の音韻」『沖縄芸術の科学』、第16号、pp.259～287、沖縄県立芸術大学附属研究紀要。
 中川奈津子・タイラーラウ・田窪行則（2015）「琉球八重山語白保方言の音韻」『琉球諸語記述文法 I』（狩俣繁久 (Ed.)）、pp.1-21。